

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

共通教育推進室
(責任者名) 坂本 敏郎 (役職名) 共通教育推進室長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>本プログラムは、全学生にとって履修可能な科目により構成している。必修科目として前期に開講している「ITリテラシー」ではOfficeソフトの基礎的な活用方法等を中心とした内容の授業を行った。後期の「データサイエンス基礎」では数理・データサイエンス・AI教育プログラムのリテラシー部分を基に、用語の説明や実践事例の紹介、また、Excelを使ったデータ分析手法を学び、目的設定、情報収集、データ分析、表現までの一連の流れを実践した。いずれの科目もオンデマンド授業で実施しているため、個別の学習状況・理解度に応じた学習支援を対面で行った。</p> <p>単位修得者の割合は、以下の通りとなっている。 「ITリテラシー」 98.1% 「データサイエンス基礎」 97.3%</p>
学修成果	<p>当プログラムに配置している科目の到達目標は以下の通りである。 「ITリテラシー」情報社会に必要な基礎知識、Word・Excel・PowerPointの活用、情報モラル等の習得 「データサイエンス基礎」データサイエンスの意味理解と、Excelを用いたデータ加工・分析・表現の習得</p> <p>令和7年度の最終成績は以下の結果となった。 ※()内は2024年度実績 「ITリテラシー」S:38.82%(55.09%) A:29.91%(22.03%) B:12.92%(10.3%) C:8.25%(5.06%) D:10.80%(7.52%) 「データサイエンス基礎」S:48.90%(33.33%) A:24.94%(36.51%) B:9.30%(15.56%) C:7.03%(7.98%) D:9.83%(6.61%)</p> <p>上記の結果から、「情報社会に必要な基礎知識、Word・Excel・PowerPointの活用、情報モラル等の習得」や「データサイエンスの意味理解と、Excelを用いたデータ加工・分析・表現の習得」については達成できていると判断している。</p> <p style="color: red;">2025年度より導入したITリテラシーアセスメントテストでは、入学直後と「ITリテラシー」「データサイエンス基礎」学習終了時点の2回テストを実施した。その結果、Word、Excel、PowerPoint、データサイエンス・AIすべての項目において、理解度の大幅な改善が見られ、学習効果が出ていることが確認できた。一方で、学部・学科により伸長の差が生じていることも明らかとなった。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>当プログラムのリテラシーレベルには、「ITリテラシー」および「データサイエンス基礎」を配置している。「ITリテラシー」では電子メール、情報倫理、Word、Excel、PowerPoint等の基本的ICTスキルを扱い、大学での学修および専門教育の基盤形成を目的としている。また「データサイエンス基礎」では、データ・AI利活用の基礎理解、データの可視化、統計的思考、Excelを用いたデータ分析等を扱い、社会におけるデータ活用を理解し初歩的に扱える能力の育成を目的としている。</p> <p>1)量的分析 「ITリテラシー」そう思う40.9% どちらかと言えばそう思う43.3% 肯定的回答計84.1% 「データサイエンス基礎」そう思う42.7% どちらかと言えばそう思う41.2% 肯定的回答計83.9% いずれの科目においても、学生の理解度は概ね良好であることが確認できる。 一方で、2024年度の結果(ITリテラシー87.5%、データサイエンス基礎86.3%)と比較すると、両科目ともに肯定的回答割合はやや低下している。 このことから、理解度は一定の水準を維持しているものの、理解度の変化要因について継続的な分析を行うとともに、授業設計や学習支援の在り方について検証を行う必要がある。</p> <p>2)質的評価 授業アンケートの自由記述では、両科目に共通して「将来に役立つ」「必要な知識・技能が身についた」「説明が丁寧でわかりやすい」といった肯定的評価が多く見られた。これらの記述から、学生は今後の学修や社会生活に資する基礎的なICT・データ活用能力を身につける科目として受け止めていることがうかがえる。 一方で、フルオンデマンド形式に伴う質問機会の少なさ、課題負担、確認テストの分かりにくさ、提出方法や通知方法に関する改善要望も一定数見られた。したがって、教育内容自体の妥当性は確認できる一方、授業運営や学習支援における改善の余地があると考えられる。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>授業アンケートの自由記述で、以下のような記載がみられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業動画をちゃんと見ていればミニレポートや作業課題に取り組むことができ、今後必要な知識もたくさん知ることができた。」 ・「今までパソコンの使い方が分からなかったけど、この授業を通してWordやExcel、PowerPointの使い方が分かるようになりました。」 ・「情報という分野は苦手だったが、覚えてできるようになったらとても面白かった。」 ・「今後必要な知識が得られて良かった。」 <p>これらの記述から、学生は本科目を今後の学修や社会生活に役立つ内容として受け止めており、科目内容に対する有用感が高いと考えられる。 一方で、内容理解度の項目でも課題として挙げたとおり、授業運営や学習支援に関する課題は、他の学生への推奨意向を弱める要素となりうる。今後は、授業設計および学生支援のさらなる改善に向けた検証が必要である。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p>	<p>本プログラムを構成する一部科目は、各学部・学科において必修科目であるため、単位取得率は100%を目指している。今年度にプログラムを修了状況は以下の通りである。</p> <p>2022年～2024年度入学者 ベーシックレベル(入門) 対象者4,990名、修了者4,793名、修了率96.13% ベーシックレベル(初級) 対象者4,990名、修了者2,055名、修了率41.18%</p> <p>2025年度入学者 ベーシックレベル 対象者1,746名、修了者1,451名、修了率83.10%</p> <p>リーフレットやポータルサイトシステム、本学のホームページを活用した積極的な周知・広報を行い、本プログラムを修了する意義を伝えることで、学生自身が主体的に学び、考える土壌を醸成しプログラム修了生の獲得を目指していく。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>当プログラムの運用を開始した令和4年度の入学生が今年度卒業を迎えた。今年度の各プログラム修了者の進路状況(業態別構成比 上位5業種※2026年3月時点)としては以下の通りである。</p> <p>ベーシックレベル(入門)修了者 1位 医療・福祉 18.6%、2位 サービス業15.6%、3位 建設・不動産業11.2%、4位 小売業10.1%、5位 卸売業 9.4%</p> <p>ベーシックレベル(初級)修了者 1位 サービス業 19.9%、2位 情報・通信業14.2%、3位 卸売業14.0%、4位 小売業13.2%、5位 建設・不動産業 12.4%</p> <p>初級修了者は入門修了者と比較して情報・通信業への就職割合が高く(※入門修了者6位7.8%)、医療・福祉(※初級修了者9位2.4%)が低い傾向にあった。</p> <p>今後は、就職進路課とも連携を行い、学生の卒業後の活躍(課題発見能力、情報分析力といったデータを適切に扱うことができる、デジタルリテラシーが身についているか等)の調査・分析の実施方法について検討していきたい。</p>
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>本プログラムの認定科目は全学共通で開講しており、各科目においては授業アンケート結果等を踏まえ、授業内容や運営方法の改善を行っている。</p> <p>一方で、教育プログラムの内容や手法に対する産業界からの視点を踏まえた点検・評価は十分に実施できていないのが現状である。</p> <p>当プログラムを履修した学生が今年度卒業を迎えることから、今後は卒業生を対象としたキャリアに関する卒業アンケートに、本プログラムの有用性に関する項目を追加するなど、教育効果の測定方法について検討を進めたい。あわせて、産業界からの視点も踏まえた教育プログラムの改善についても検討を進める。</p>
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	<p>本プログラムは全学部の学生を対象としているため、専門分野が異なる学生でも関心を持てるよう、AIやデータサイエンスが社会や将来のキャリアとどのように関わるかを具体的な事例を通して紹介している。特に導入部分では、学生自身の興味のある分野におけるAIやデータ活用事例を調べる課題を取り入れ、自分ごととして理解できるよう工夫している。また、生成AIなど最新の技術動向を授業内で紹介し、AIを身近な技術として捉えられるようにしている。さらに、Excel等を用いたデータ分析演習では、単なる操作習得にとどまらず、自ら考察や解釈を行う課題を設定し、データを用いて課題を考える学びの面白さを実感できる授業設計としている。これらの取り組みにより、数理・データサイエンス・AIを学ぶ意義や社会的価値への理解を促進している。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>本プログラムに配置している「ITリテラシー」および「データサイエンス基礎」では、オンデマンド型授業を用いて操作手順や概念が理解しやすいよう、視覚的に分かりやすい教材動画を作成している。学生からも「操作方法が理解しやすい」「繰り返し視聴できるため理解が深まる」といった肯定的な意見が多く寄せられている。また、生成AIやデータ活用事例など社会での最新動向を授業内容に随時反映し、教育内容の更新を継続している。さらに、クラウド型の成績管理システムを活用し、実際のOfficeソフトを操作しながら学習する実践的な演習を取り入れることで、理解度や成長を可視化し、学習意欲の向上につなげている。今後も授業アンケートや学習成果を踏まえながら教育内容・方法の改善を継続し、より分かりやすく効果的な授業の実現を目指す。</p>

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 共通教育推進室

(責任者名)	坂本 敏郎
(役職名)	共通教育推進室長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>本プログラムは、全学生にとって履修可能な科目により構成しており、必修科目として前期に開講している「ITリテラシー」ではOfficeソフトの基礎的な活用方法等を中心に、個別の学習状況・理解度に応じて学修支援を行った。後期の「データサイエンス基礎」では数理・データサイエンス・AI教育プログラムのリテラシー部分を基に、用語の説明や実践事例の紹介、また、Excelを使ったデータ分析手法を学び、目的設定、情報収集、データ分析、表現までの一連の流れを実践した。2026年度より、データサイエンスの分野で最も利用されるPythonを用いて、プログラミングの基礎とデータ分析の方法を学ぶことで、現代社会のニーズに応えられる知識と技術力を獲得することを狙いとした「データサイエンス応用」を開講する。</p> <p>ITリテラシー：96.0% データサイエンス基礎：95.0%</p>
学修成果	<p>応用基礎レベルプログラム対象者の令和7年度「ITリテラシー」「データサイエンス基礎」の最終成績は、以下の通りである。</p> <p>ITリテラシー：S：40.52%、A：30.08%、B：12.54%、C：8.06%、D：8.80% データサイエンス基礎：S：51.38%、A：25.81%、B：9.22%、C：6.21%、D：7.38%</p> <p style="color: red;">2025年度より導入したITリテラシーアセスメントテストでは、入学直後と「ITリテラシー」「データサイエンス基礎」学習終了時点の2回テストを実施した。その結果、Word、Excel、PowerPoint、データサイエンス・AIすべての項目において、理解度の大幅な改善が見られ、学習効果が出ていることが確認できた。一方で、学部・学科により伸長の差が生じていることも明らかとなった。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>応用基礎レベルプログラム対象者の令和7年度「ITリテラシー」「データサイエンス基礎」履修者の授業アンケート結果は以下の通りであった。</p> <p>「私は、この科目の内容をよく理解できた」の設問に対して、「ITリテラシー」では、そう思う41.0%、どちらかと言えばそう思う43.2%と84.2%の学生が理解できたと回答をしている。「データサイエンス基礎」ではそう思う42.8%、どちらかと言えばそう思う41.0%と83.8%の学生が理解できたと回答をしている。</p>
学生アンケート等を通じた先輩等他の学生への推奨度	<p>授業アンケートの自由記述より、以下の記載が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私はパソコンなど機会を使うのが苦手ですが、この授業を通して少しは使えるようになったと感じているので良かったです。 ・情報という分野は苦手だったが、覚えてできるようになったらとても面白かった。 ・パソコンの使い方を基礎から学ぶことができた点がよかった。特に印象に残っている学びは、レポート作成をしたことです。 ・授業動画をちゃんと見ていればミニレポートや作業課題に取り組めるというのは良かったし、今後必要な知識もたくさん知れた。 ・今までパソコンの使い方が分からなかったけど、この授業を通してワードやエクセル、パワーポイントの使い方を知ることができました。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>令和7年度は、アドバンスレベルの制定年度であるため、達成状況としては評価することができないが、本プログラムを構成する一部の科目は、各学部・学科において必修科目であることや、共通教育科目で構成しているため、多くの学生のプログラム履修することを目指している。</p> <p>今後、学生に対しては、単に履修登録に関する推奨・促進を行うだけでなく、入学時点から本プログラムを修了する意義を伝え、学生自身が主体的に学び、考える土壌を醸成したいと考える。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	当プログラムは、2025年度以降の入学を対象のカリキュラムでプログラム構成しているため、現時点では修了者の中に卒業生は発生していない。そのため、現時点ではプログラム修了者の進路や企業等での活躍状況等を評価することはできない。今後は、プログラム修了者の進路状況の把握や、企業等へのアンケートなどを通じて、修了者の社会での活躍状況等（課題発見能力、情報分析力といったデータを適切に扱うことができる、デジタルリテラシーが身についているか等）の調査・分析を実施していきたい。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	産学公連携等の連携先や就職先の企業や自治体に対して、アンケートやインタビューなどを行い、プログラム内容や手法についての意見集約を行う予定である。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	本プログラムは全学生を対象としているため、学生一人ひとりの専門領域や関心の違いに応じて、数理・データサイエンス・AIの「学ぶ楽しさ」と「学ぶ意義」を実感できるように設計している。「ITリテラシー」および「データサイエンス基礎」では、自分の学部・学科で扱われているデータや、専門領域でのAI活用事例を調査する課題を取り入れている。これにより、学生は自分ごととしてデータ活用を捉え、将来のキャリアと学修内容がどのように結びつくかを具体的に理解できる。「データサイエンス応用」では、プログラミングによるデータ処理の効率化や自動化の効果を体験的に学ぶ内容を配置している。自ら手を動かして分析を行うことで、データから新たな知見を得る面白さ、課題解決に活かせる有用性を実感できるよう工夫している。さらに、選択必修科目として各学部・学科の特性に応じた科目を配置し、学生自身の視点で考察を加える課題を課すことで、単なる作業に終わらない学びを促している。このような段階的・体系的な構成により、学生が楽しみながら学びの価値を理解し、自ら主体的に学び進める姿勢の育成を目指している。
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>「ITリテラシー」および「データサイエンス基礎」はオンデマンド形式で実施しており、学生が迷わず学べるよう、画面の見やすさや操作手順の理解しやすさを重視した学習動画を作成している。授業内容は生成AIの進展や各業界での最新事例を随時取り入れ、学生が最新動向に触れながら学べるよう工夫している。さらに、社会の変化や技術発展を踏まえ、科目内容を定期的に見直す仕組みを整え、教育効果の向上を図っている。学習動画の改善、教材更新、評価手法の再検討などを継続的に行うことで、学生が現実の技術トレンドに対応した知識や技能を習得できるよう柔軟に対応している。アンケートでも「動画で操作方法が分かりやすい」「繰り返し視聴できて助かる」といった肯定的な意見が多く寄せられており、理解促進に寄与している。一方、「データサイエンス応用」は、初心者がつまずきやすいプログラミングを扱うため、対面授業として実施する。授業ではLAを配置し、課題につまずいた学生を個別に支援する体制を整える。今後も、授業設計・教材・学習支援体制の改善を継続し、学生一人ひとりが「分かりやすく」「学びやすい」と感じられる教育環境を維持・向上させていく。</p>